

表象を忘れない

——新聞記事の地理学的研究を通じて考える——

成 瀬 厚

- 1 はじめに
- 2 人文・社会科学における表象
 - 2.1 地理学
 - 2.2 現代思想：代理／表象
 - 2.3 人類学：表象の危機
 - 2.4 歴史学：表象の限界
 - 2.5 社会学，カルチュラル・スタディーズ
- 3 新聞記事という地理的表象
 - 3.1 ニュース報道について
 - 3.2 日本における新聞研究
 - 3.3 英語圏地理学における新聞研究
 - 3.4 表象論と新聞
- 4 おわりに

1 はじめに

森（2009）は最近の英語圏地理学文献を渉猟し、言説や表象の概念を乗り越えようとしている。英語圏地理学では言説や表象に過度に依拠する状況があり、その状況への批判は同意すべきものである。それは翻ってみれば、言説や表象という概念が一定の影響を持って受容されていたということである。

日本の地理学でも表象概念は一定の影響を持ってきたが、地理的表象を主たる対象とする研究はさほど蓄積されていない。日本では、森が「物質論的転回」として論じている最新理論を用いずとも、（物質という言葉すら使わずに）表象より物質に比重を置いた研究が圧倒的多数である。そうした背景において私は、英語圏地理学に依拠して表象研究を葬り去ることより、改めて表象について整理することの必要性を感じている。

その作業を始めてみると、成瀬ほか（2007）で言説概念について行なったような整理が簡単ではないことに気づく。表象の概念および語は多様で、日本語の教科書は見当たらず、英語圏地理学においてもこの概念を中心とした展望論文もこれといったものはない¹⁾。「あたかもその意味が明快であるかのように、当然のこのようにしばしば使われている」（アン

表象を忘れない

ダマールほか、2000：314）という感覚を私もしばしば抱く。

本稿は、地理学における表象を見直そうとするものであるが、網羅的なものではない。前半では、人文・社会科学の諸分野における日本語で読める表象論をいくつか紹介している。後半では、表象研究の一事例として、新聞を対象とする地理学的研究について議論する。本稿で新聞（記事）というメディアを選択した理由は、それが地理学で古くから用いられてきた対象であると同時に、物質性の議論を射程に入れた表象研究を、地理学的主題を中心に据えて行なうことができるものであると考えるからである。前半で取り上げる表象論は新聞研究に直接関わるものではない。新聞を対象とするのであれば、カルチュラル・スタディーズやメディア研究を詳細に検討すべきだが、新聞のメディアとしての特殊性を勘案し、また地理学全般に活用されるような表象論を選別した。私は、具体的な素材を用いた経験的研究をする際に、より広い議論を意識することが必要であると考えている。

2 人文・社会科学における表象

まずは各分野における事典で表象の語をみてみよう。『岩波哲学・思想事典』では、ギリシア語1語、ラテン語3語、英語3語（idea, perception, representation）、独語1語、仏語3語と対照させている。アリストテレス『靈魂論』からの歴史を辿り、この語が「歴史的には様々な用語で表された」（磯江、1998：1339）という。なお、山田（2014：3）によれば、日本において独語 *Vorstellung* の訳語としての表象が定着するのが『哲学字彙』の改訂版（1912年）あたりだという。『現象学事典』では、フッサール現象学を「表象主義」（山崎、1994：400）と表現している。

『最新心理学事典』では「知識」の項目に「表象」の下位項目が立てられ、「表象とは、対象がなくともその対象を表現する表記法や記号の集合であり、事物や事象、概念やカテゴリー、あるいはそれらの特徴を特定する」（川崎、2013：516）ものと規定されている。『精神分析事典』では、「現実には存在しないものの心像を思い浮かべることに力点が置かれ」（狩野、2002：414）、フロイトがこの語を多用したという。

『政治学事典』では美学者の谷川（2000）が執筆しており、政治学とは無関係に芸術の領域における用法をまとめている。弘文堂『社会学事典』では「集合表象」をデュルケム研究者の宮島（1988：436）が執筆し、「社会は本質的に表象から成り立つ」と記している。表象単独の項目はない。『新社会学辞典』では哲学者の木田（1993：1229）が執筆し、「外的対象の意識に映じた姿」とする短い記述しかない。『現代社会学事典』では毛利（2012）が執筆しているため、カルチュラル・スタディーズの文脈で書かれている²⁾。『現代フェミニズム思想辞典』（アンダマールほか、2000：314）では、Representationの項目に「表象、代弁」の訳語を充て、「非表象的な文化の形式」という表現もみられる。

マーカス・フィッシャー (1989) 翻訳出版以前の『文化人類学事典』(石川ほか, 1987) には「集合表象」の項目はあるが、表象単独の項目はない。同じ弘文堂から出版された『文化人類学文献事典』はマーカス・フィッシャー (1989) の紹介に2ページを割き (多くの文献は半ページ)、翻訳者自身によって「文化人類学における地殻変動ともいえる根本的な変革を特徴づけた書物である」(永淵, 2004: 214) と紹介されている。中項目事典となった丸善『文化人類学事典』では、「6. 表す」の概説を太田 (2009: 218) が執筆し、表象についても論じている。そこでは、人類学者の民族誌という行為への内省だけでなく、「憑依霊, 亡霊, 妖術や呪術などの不可視の存在」という人類学の調査対象についても論じられる。

表象文化論についても触れておこう。1989年に東京大学教養学部表象文化論専攻ができ、そこに所属する研究者たちにより雑誌『ルプレザンタシオン』(筑摩書房, 1991~1993年)が発行されていた。2005年には表象文化論学会が設立され、学会誌『表象』が2007年に創刊される。ここでの表象は芸術的・文化的表現と同義であり、ある意味所与のものとして扱われる。

以下、本章では分野ごとの表象論を概観するが、地理学全般で活用できる議論に限定している。哲学や心理学については除外し、表象文化論についても検討しない。本章では地理学における表象の語の使用を確認したうえで、現代思想、人類学、歴史学、社会学およびカルチュラル・スタディーズについて概観する。各分野についても網羅的ではなく、現代思想についてはフォーコー、デリダ、スピヴァクを、人類学については「表象の危機」と呼ばれる議論を、歴史学については「表象の限界」、社会学については「集合表象」の現代的意義、カルチュラル・スタディーズについては表象研究への批判点についてみることにする。また、本稿では引用が多くなるが、それらの引用を導きの糸として、本稿で紹介しきれない表象論に辿り着ければと思う。

2.1 地理学

表象の語を用いた日本の地理学論文について、J-STAGE³⁾を用いて概観する。継続的に表象の語を用いた論文が掲載されている『地理学評論』と『人文地理』について、年代別に論本文数を整理した(表1)。私が各論文に目を通して表中の項目に分類した。日本では戦前から表象の語は用いられてきたが、1960年代までは特定の学術的意義を込めた論文はなかった。

明確な意味でこの語が用いられるのは、メンタル・マップ研究や認知地図研究の「心的表象」である。それらは心理学に依拠して個人的な認識の表現としての広義の地図を心的表象としたが、地図研究でも、狭義の地図を空間表象として捉える文献が散見された。1980年代に入ると「集合表象」の使用もみられるが、特定の動向や潮流が形成されるには至っていない。

表1 日本の地理学における「表象」を用いた論文本文数

発表時期	現代思想		集合表象		心的表象		人類学・民俗学		その他		合計		総計
	JJHG	GRJ	JJHG	GRJ	JJHG	GRJ	JJHG	GRJ	JJHG	GRJ	JJHG	GRJ	
1920年代									2		0	2	2
1940年代								1	1	1	1	2	3
1950年代								1	1	5	1	6	7
1960年代									2	1	2	1	3
1970年代					1	1	1	1	1	1	3	2	5
1980年代前半					2	1	1	1	2		5	2	7
1980年代後半	1		1		1	2			1		4	2	6
1990年代前半	2	1	1	1		2	1	1	3	1	7	6	13
1990年代後半	6	3	1	1							7	4	11
2000年代前半	13	10			2	2	2	1		1	17	14	31
2000年代後半	3	3				1	2			1	5	5	10
総計	25	17	3	2	6	9	7	5	11	13	52	46	98

注1：JJHGは『人文地理』を、GRJは『地理学評論』を示す

注2：表中の数値はJ-STAGEにおいて「表象」の検索結果。『人文地理』は2005年、『地理学評論』は2010年まで

日本における表象の使用は1990年代後半に増加し、2000年代前半にピークを迎えている。それには『地理科学』に掲載された大城ほか（1993）の存在が大きい。この論文は現代思想的な表象論について解説している。「表象の危機」と称されるその議論は、地域や場所、世界を地理学がどう描くかという内的批判についてのものである。

荒山・大城（1998）は、大城ほか（1993：7）で示された問題意識から、経験的な研究事例を中心に据えた論集である。序章には「全体的に物質文化の次元よりも「表象」の次元により多くの頁を割くこととなった」とあるが、私にとってはその印象は薄い。表象を章タイトルに用いたのは第10章のみであり、本文中で表象を用いた中島（1998：41）が「表（タブロー）」や「表象（ルプレザント）」と表記しているが、タブローなどの語の明確な説明はない。当書が、日本の統治下にあった朝鮮を含む近代日本の事例を中心にし、文化だけでなく政治や経済に重きを置いており、表象がより広義に理解されている感がある⁴⁾。

ルフェーヴル（2000）が空間と表象を結びつけて論じたことから、この議論に依拠する地理学研究が表象の語を用いるようになった。神田（2001）はこの議論を紹介しているが、その後は「空間の表象」や「表象の空間」という語が形骸化している感が否めない。

『人文地理学事典』（人文地理学会、2013）は索引で「表象」を2箇所参照している。一つは「博物館」で、「文化や歴史を表象することには、「する側」と「される側」のあいだに不均衡や非対称性が潜んでいる」（瀬川、2013：311）とある。もう一つは「ツーリズム空間の形成」（森、2013）だが、表象の語は用いられていない。欧文索引には「representation de l'espace 空間の表象」と「representational analysis 表象分析」がある。前者はルフェーヴル（2000）に言及した「空間」（水岡、2013）で、後者は「表象分析を駆使して市民の生活感覚に迫る都市世相史、盛り場論も登場した」（西部、2013：448-449）と記載された「都

市史研究と地理学」である。『人文地理学辞典』（山本ほか，1997）に「表象」の項目はない。

英文辞典『*The Dictionary of Human Geography*』で representation の項目をみると、第3版では Johnston (1994) が政治地理学の文脈で短く代議員制について記述している。第4版では1990年代に表象研究を牽引してきた Duncan (2000: 704) が執筆し、前半で人類学における「表象の危機」に言及している。中盤では地理学や旅行文学における比喩表現や修辞に言及し、「表象はテキストや言葉、画像のみならず、景観のような物質文化も含む」と自らの研究を総括している。第5版では Dubow (2009) がフッサールからハイデガー、フーコー、社会構築主義に至る思想的系譜を説明し、視覚文化研究など芸術分野への傾向を示唆している。

英語圏では表象を表題に用いた論文集が1990年代前半に多く出版されたが、この語について詳細に論じたものは少ない。Duncan and Ley (1993: 9) は地理学が世界を表象する学問であるとの認識から、20世紀米国の個性記述から実証主義、ポストモダニズム、解釈学へと至る流れのなかで表象の意味を辿っている。そして各時期の表象をより広い思想の流れのなかで説明し、文化地理学と至り、「表象とはテキストの外部に存在する何かの産物ではない」と結論する。

ソシュール、バルト、フーコーらに依拠する表象研究は、英語圏において「非表象理論」などによる批判あるいは代替理論によって、ある意味で過去のものになりつつある。しかし、私はこの概念を一過性の流行として済ませられるものでなければ、下位分野に押し込められるものでもないと考える。「表象の危機」の議論に限られず、表象は社会や世界を観察し考察しようとする地理学者として認識論的に常に意識すべき概念である。マッシー (2014) が第2章を「空間／表象」と題し、空間の理解において表象が重要な役割を果たすことを示唆しており、この複雑で難解な空間論のよりよい理解のためにも、表象について考える必要があるだろう。

2.2 現代思想：代理／表象

ウィリアムズ (1980) によれば、英語 represent は present とともに14世紀に登場し、物理的な現前と頭に思い描くという2つの意味を獲得していた。その後、represent は「象徴する」と、「代表する」の意も有している。心に描くの意とないものの代わりをするの意とは重複していた。14～15世紀には絵画や演劇を represent (上演) として捉えようになるが、芸術と政治の領域で複雑な歴史を辿る。

フーコー (1974: 58) によれば、16世紀末までの知の体系を特徴づけていたのが模倣であり、「言語は物の記号としての価値をも」っていた。17世紀以降の古典主義の時代において、「知ることとは言語を言語に関係づけることである」(フーコー, 1974: 65)。ここで「言葉は物ではない」。また、「ないものの代わりをする」という表象の意味も理解されよう。

表象を忘れない

「ある観念が他の観念の記号となりうるのは、両者のあいだに表象関係が設定されうるからばかりでなく、この表象作用が、表象するほうの観念の内部に常に表象されうるからである」（フーコー、1974：90）。この定義は、この語に付けられた反復の接頭辞の意味を汲んでいる。フーコーは、一般文法、博物学、富の分析で特徴づけられた古典主義エピステーメーが18世紀末に表象の限界に達したとして、近代エピステーメーの分析へと向かう。

フーコーを受け、サイド（1986a：277）は「表象とはそれが表象であればこそ、「真理」の周辺の実に多くの事柄に結び合わされ、噛み合わされ、埋め込まれ、織り込まれているのであり、「真理」とはそれ自体一つの表象なのだ」と述べる。サイドは、フーコーが近代期における学的営為について論じたことを、現代に至るまでの帝国主義、植民地支配という文脈で論じている。サイドに関しては、後に触れるスピヴァクの議論や新聞記者の役割などとも関連して、表象の語を表題に用いたサイド（1995：35）にも触れておこう。サイドは「知識人が、表象＝代弁する技能を使命としておびた個人である」と主張している。

現象学の《諸原理の原理》を「現前ないし現前性」とするデリダ（1970：12）にとって、再現前ないし再現前性、すなわち表象は無視しえぬ概念である。デリダはフッサールによる表象に関わるドイツ語のいくつかの概念を検討し、(1) 一般的に現前させるという意味での *Vorstellung*, (2) 現前 (*Präsentation* や *Gegenwärtigung*) の反復としての *Vergegenwärtigung*（これは *re-presentation* とハイフンで区切ることで区別可能）、(3) 他の現前の代わりになるという意味の *Repräsentation*, *Repräsentant*, *Stellvertreter*, の三つの意味を引き出した。ここで指摘されるべき点が、現前に関わる反復と代替というものである。記号というものは一回限りであることはあり得ないし、代替なしには意味を持ちえない。

スピヴァク（1998：9）はマルクスの用法を確認した上で、フーコーを批判し、次のように主張する。「*représentation* の二つの意味がいっしょくたにされているのだ。政治においてもちいられるような「代弁／代表」という意味での *représentation* と、芸術や哲学においてもちいられるような「再現／表象」という意味での *représentation* とがである」。そして、両者が「相互に関連はしているが、どちらか一方へ帰一化することは到底不可能なまでに非連続的でもある」という。

2.3 人類学：表象の危機

「人文科学における表象の危機」を論じたマーカス・フィッシャー（1989：26）は序章で、人類学における2つの論争の中心となった著作について言及している。1つは専門的研究者に衝撃を与えたサイド（1986a）であり、もう1つがより広い方面にわたる論争を起こしたフリーマン（1995）だという。1つ目の論争によって明らかになった人類学が陥った窮地は「非西洋文化の記述と分析に関する窮地」と呼ばれ、2つ目の論争によるものは「文化批判の一形式としての人類学の立場」だという。

1つ目の窮地に対しては第4章「世界規模の歴史的な政治経済の説明」で、2つ目に対しては第5章「文化批判としての人類学の自国への回帰」で議論される。第4章ではマクロな視点から、人類学者の営為を相対化する試みがなされる。その議論の冒頭では、ウォーラス・ステインの世界システム論が参照される。世界は植民地支配によりヨーロッパ起源の近代世界経済が拡張し、宗主国側の人類学者が植民地へとフィールドワークに赴くという構図のなかで人類学が発展してきた歴史を内省することが迫られる。

第5章では、人類学による学的成果がいかに自国の文化を見直す契機となりうるかという観点から論じられる。そこではフランクフルト学派などの文化批判の議論が参照される。

これらの議論を受け、第6章では認識論的批判と間文化的並置という2つの戦略的手法を用い、人類学が自国の文化を脱親和化する方策を模索する。自国文化という親しいものを異化することで、新しい視点からそこに潜む問題をあぶりだしていくことに人類学が寄与するのだという。

このように、人類学においては「表象の危機」という事態が自らの営為を根本から揺さぶるものとして否定的に作用するにもかかわらず、それを逆手にとって新しい、そして米国らしくよりプラグマティックな方向転換をするようになる。

2.4 歴史学：表象の限界

歴史学の危機という問題設定に対する指針を求める『アナル』編集部への回答として、シャルチエ（1992：16）が掲載された。この論文はデュルケムの集合表象に立ち戻ることの重要性を指摘し、「表象をめぐる闘い *luttres de représentation* の中心的争点は、社会構造そのものを秩序化し、つまりは階層序列化することにあるから、文化史は、この表象をめぐる闘争を研究することによって、単に経済的闘争の研究でよしとしている社会史へのあまりに厳格な従属からは離れることになる」という。シャルチエはフランス語辞典の「表象」の項目から、存在していないものを見えるようにするという語義と、現前しているものを露にみせることという2種類の意味を確認する。

この論文に応えたギンズブルグ（1992：77）は、表象の語が英国やフランスにおける国王の葬儀で用いられた人形や空の柩を指すことがあったという。この人形や柩は存在しないものの代理なのか、実在していた国王の身体の再現前なのか。それらは単に国王の身体の代理＝表象なのではなく、「国家という抽象的存在を具体的な形で象徴するもの」である。近代後期、あるいはポスト・モダンという時代に表象の危機が初めて問題化されたわけではなく、この語に込められた二重性はその語の歴史とともにある。

「表象の限界」を書名に用いたフリードランダー（1994：17）は1990年に行われた研究会議の記録である。過去を扱う歴史学にとって、現在において現前に立ち会えない以上、再現前の問題は避けられない。この会議の主宰者は「加害者たちがかれらの行為のいっさいの痕

表象を忘れない

跡をカムフラージュするだけでなく、消しさろうとして、かなりの量の努力を投入してきた」ことにより再現困難な歴史的事実であるアウシュヴィッツ、あるいはホロコーストを論題に選んだ。

ホワイト（1994：87）は自らの相対主義的な態度を崩さない。「わたしは、ホロコースト、〈最終解決〉、ショアー、フルバン、すなわちドイツ人によるユダヤ人の集団虐殺を、人類史の他のどんな事件とも同様に、表象不可能であるとはかんがえていない。ただ、それを表象するには、歴史においてであろうとフィクションにおいてであろうと、社会的モダニズムが可能にした種類の経験を表象するために発展してきた文体、すなわちモダニズム的文体が要求されるというだけのことである」。

ギンズブルグ（1994：99）はホワイトの主張について、彼の「知的発展の跡」を辿るという真摯な態度で批判する。ギンズブルグの歴史研究は、歴史上さまざまな形態で残された痕跡を、糸を紡ぐように織り合わせることでみえてくるものを探求しようという試みである。

アンダーソン（1994：137）もホワイト流の「歴史学を修辞学に還元してしまうような現代の懐疑主義」に対して留意を示すものの、ギンズブルグのように厳しく批判することに対して留保する。「表象という行為を、単なる願望や（ミシェル・フーコーの学説の継承者のように）不可能なことと考えるのではなく、責任と考える」方向性を示す。

ドイツでアウシュヴィッツをめぐってなされた歴史家論争について、ハーバーマスの意見を中心に検討したラカプラ（1994：169）は「言語の歴史学上の使用」について次のように論じる。それは「人に沈黙を余儀なくさせるかもしれないような極限的事例に向かい合うと、特別の困難と難題に直面する」と。この極限的事例がアウシュヴィッツである。アウシュヴィッツのような困難に立ち向かう歴史家は時に沈黙せざるをえないが、それは歴史学の敗北ではないという。歴史学は科学的で精確な表象を追及するのみではなく、「ナチ体制と比較可能なできごとの再発に効果的に抵抗するような、言述と社会生活双方の生命力ある仕組みの生成といかに関連しているかを探求すること」（ラカプラ、1994：171）が必要だと主張する⁵⁾。

表象の限界に何を措定するかに関する歴史学の議論としては、グリーンブラット（1994：10）による意見も加えておきたい。「表象と現実の区別立てを崩してしまうことは、理論的に言って誤りであるだけでなく、実践的にも大失策ということになる。（中略）両者はしっかりと組み合わせられていて、恍惚をもたらす結合もしくは離婚もない世界にあって、不安定な結婚をしているといえる状態にある」。

2.5 社会学、カルチュラル・スタディーズ

社会学ではデュルケムの集合表象があるが、清水（2008：24）によれば「デュルケム自身によれば、記憶を含め、知覚に基づいて外的対象の像を意識のなかに描くことを指して第

一義的に用いている」という。この概念の現代的意義を論じる安達 (2007:118) は『社会分業論』(原著 1893 年) から「表象としてのネイション」という論点を引き出した。デュルケムにとって表象とは社会の有機的連帯の契機であり、ネイションという社会集団にとって国家ないし政府が重要な役割を果たすという。ここでは「外形・表象」と表現されたり、トーテムの事例が出されたりと、物質的な側面が論じられる。

社会学者である阿部・古川 (2011:75-76) はカルチュラル・スタディーズにおける表象分析の経過を辿っている。表象研究に寄せられた批判は 2 点に要約できる。1 点目は「政治・経済的な組織や制度の次元がカルチュラル・スタディーズの表象分析では等閑視されている」というものであり、2 点目は「『表象された文化 (represented culture)』と比較して『生きられた文化 (lived culture)』が十分に分析されていない」というものである。彼らはどちらの批判に対しても、その後の研究では十分に考慮されるようになったと同時に、そもそもその認識論のなかに組み込まれていると反論しているが、この批判は今後の研究でさらに議論すべきものとしている。

次章では、新聞記事を対象とした研究を取り上げるが、新聞の社会学研究のなかで、小川 (2014:93) は読者を想定して生産されるメディア・テキストの解釈を通じて、テキストを理解する人々の方法論を解明するという観点からの「新聞というより歴史的に先行するメディアの研究にはまだまだ開拓の余地がある」と述べている。

本章では、人類学と歴史学から世界を表象するという地理学の学的営為を問い直すこと、またそれは同時に研究対象としての新聞などの表象の生産過程を理解する方策について学ぶことができる。カルチュラル・スタディーズにおいては、表象テキストに立ち向かう態度において、地理学が同じような分岐点に立っていることから、その展望について共に考えることができる。これらを踏まえ、本稿の後半では、表象を対象とする研究について、新聞を事例にして考えることとする。

3 新聞記事という地理的表象

3.1 ニュース報道について

ブーアスティン (1964) の『幻影の時代』は、第 3 章「旅行者から観光客へ」が観光研究の文脈で論じられている (荒山, 1995) が、第 1 章「ニュースの取材からニュースの製造へ」はニュース報道に関する研究として重要である。彼の近代観は素朴なものだが、思考の出発点とニュース報道史の概観としては有用である。

ニュース報道は、新聞、ラジオ、テレビという媒体で制度化されてから、自己増殖的な生産様式に陥っている。制度化されたメディアは、毎日の限定された紙面の面積、放映時間に、毎日の情報を収めねばならないと同時に、埋めなくてはならない。このことから、無数に

表象を忘れない

ある事件を選択する際の基準の問題、メディアが事件を創り出す「擬似イベント」という問題が生じる。

ブーアステインの近代批判に対し、マクルーハン（1967：267）はそれこそが新聞の本質であり、批判すべきものではないという。メディアをホットとクールとで区分するおなじみのやり方において、「新聞はホット・メディアだ」といい、「新聞は、紙面の緊張度を高め、読者の参加を要請するために悪いニュースを必要とするのである」という。そして、「新聞というものは文化が違えばまったく効果もさまざまだ」（マクルーハン、1967：265）と主張し、新聞のフィクション的性格やモザイク性、共同体的参加などをその本質と指摘する。さらに、この時代においてすでに情報の電子化をにらみ、「情報のスピードが遅いからこそ、代理とか代表が必要となるのである」（マクルーハン、1967：260）という記述は表象との関係で覚えておきたい。

新聞は単一の作者によって書かれる物語を有せず、紙面のどこからでも読むことができるようなコラージュである。このことは、紙面に均質性を持たせるために均質な文体を必要とする。新聞は読者に対する分かりやすさの目的のために、比喩表現が伴う一方で、あまり親しみを増してもいけない。劇的なニュースとは我々の日常生活とはかけ離れたものでなければならない。

ニュース報道の地理学的含意として重要なのは場所収集である。擬似イベントや娯楽的な報道から構成されるこのコンパクトな世界性が、実際の世界の事実から成り立っているように見做される。一日の世界を出来事と非出来事を区別することなく一日のニュース報道メディアの物理的限界に圧縮することは不可能である。にもかかわらず、多くの新聞が同じような事件を取り上げる。ニュース報道は世界という時空間上を限られたトポスをトピックとして選択しながら世界の歴史を作る。サイド（1986b）が cover という単語を二重の意味で用いたように、報道する to gather news of とは世界を何かで覆うこと to place something over the world を意味する。

3.2 日本における新聞研究

新聞は地理的な要素を基礎とするものであり、地理学で新聞記事を利用するのであれば、参照したいのが山田晴通の一連の研究である。原田 榮の地理学研究から英語圏地理学における1980年代までの動向を山田（1986）によって俯瞰しておきたい。過去の新聞研究は、取材地域、発行地、配布地域という3つのテーマに分けられる。新聞がある地域で発生した出来事の取材に基づき、別の地域に属する記述主体によって生産され、新聞紙が流通し、特定の地域に属する読者によって消費されるという一連の文化の回路を無視してはその記事内容の解釈は意味を成さない。

山田は1980年代に東北地方の地域紙を調査し、3編の研究論文を発表した。山田（1984）

は石巻における地方紙の歴史を大正期から辿っている。戦前の『石巻日日新聞』の紙面構成や『石巻新聞』の一面トップ記事の変遷、『河北新報』の世帯普及率の地図化、そして媒体別の記事の地理的スケールなど、さまざまな観点から新聞という研究対象を捉えている。山田 (1985a) はより広い視点に立ち、東北地方の日刊地域紙 35 紙について、定量的手法を用いて分析した。全国紙—県紙—地域紙の配布構成比や世帯普及率の把握は、新聞を通したナショナル—リージョナル—ローカル関係という地理学的主題の分析だといえる。日刊地域紙の分析では、県都からの道路距離や人口、全国紙の配布構成比などを説明変数として解釈したもので、英語圏地理学の新聞研究と同様の手法を用いている。山田 (1985b) では、日刊地域紙のなかでも系列紙に注目し、スケールの異なる新聞間関係、あるいは新聞資本の複数業種展開、それらの企業行動におけるローカル・ニュースに込めた思想などを明らかにしている。

その後も山田は継続的に新聞の研究を進めているが、その視点は地域メディア論というより広いものになっている。地理学的視点も含まれるが、1980年代の論考のように直接的に地理学を意識していない。山田 (1999) は地下出版ともいえる小規模日刊紙の実態を、松本市を事例に明らかにしている。その詳細な分析はメディア研究としては興味深いが、地理学的含意は少ない。山田 (2009) は山田 (1984) の表題を流用しているが、かつての地理学的分析はなされていない。唐津市における日刊地域紙の廃刊の経緯と実態を示すことで、デジタル化が進行する 21 世紀におけるニュース・メディアのあり方を問いかける内容となっている。

近年では、明治末期に 1 年間のみ発行されていた『週刊多摩新聞』を取り上げた川原 (2009) がある。地方紙を「学習・文化活動の一形態」と見做すことで、投書欄を中心に、広告主の分析なども行っており、興味深い。また、新聞広告を主たる対象としたものではあるが、長野県で競合する地方紙 4 紙の存立について福井 (2013) が考察を行っている。

新聞の制作過程に関する学術的研究は多くなく、大石ほか (2000) による成果は貴重である。前半では既存の文献・資料から一般的なニュースの制作過程を図示し、欧米の研究から理論的考察も行っている。事例としても茨城新聞を扱っていて山田の地方紙研究と重なる部分もあり、地理学的にも有用な知見と方法を学ぶことができる。

日本における新聞の発生や読者の成立についても確認しておきたい。日本の近代化におけるニュース報道の断絶よりも連続性を強調した木下・吉見 (1999) から学ぶことは多い。また、新たな新聞というメディアを民衆が受容する過程を、小学校の成立とその活用という観点から、樋口 (2014) は京都を事例に考察している。

3.3 英語圏地理学における新聞研究

バージェス・ゴールド (1992) が序文で検討した鍵概念は文化、大衆文化、イデオロギー、

表象を忘れない

メディアという4つであり、表象は含まれていない。1990年代の類似の地理学論文集と比して、古いメディアである新聞への注目が特徴的である。地理的表象の問題を基礎から再考するのに、本書の再読は有用である。

ブルッカー＝グロス（1992）はヨーロッパの新聞報道において、19世紀初めにニュースを地理的に束ねる傾向が生じ、その後出来事志向に移行することを指摘している。この考察は、1839年から1969年までの『シンシナティ・エンクワイラー』から取られた記事の内容分析に基づいたものであり、新聞記事の取材地と出版地の関係に関する定量的分析を基礎にしている。

バージェス（1992：245）はロラン・バルトの神話概念を援用した解釈論的アプローチによる新聞記事の分析であり、ニュース報道を素朴な事実の伝達とは見做していない。暴動に関する分析から「暴動の言説は戦争の隠喩であった」と述べ、その文体は装飾的であり、物語的であることを強調する。そうした文体は、記事の編集・生産体制が厳密に構造化されているところにも起因する。バージェス（1992：269）は「彼らは誰よりも素早く文章を作ること強いられていた」という。実在する場所であるインナー・シティからのニュースが「どこでもないところからのニュース（News from nowhere）」となっていると指摘する。ただし、ここに含まれる真偽という二分法には留意しなければならない。

バーミンガムにおける犯罪に関する新聞報道と実際の発生数を調査したスミス（1992）は、世論の形成においてマス・メディアの受動的な需要よりも、公衆によるゴシップやうわさによる能動的な集合的行動が重要であることを強調している。この研究は、カルチュラル・スタディーズの表象研究に向けられた批判に応える民族誌的研究の一事例だといえる。

その後も地理学において新聞研究は継続的に行われているが、英語圏の地理学雑誌で新聞研究を総括する論文は管見の限りまだない。最近の状況を把握するために、メディア地理学の英文ウェブ・ジャーナルである『*Aether: the journal of media geography*』の2009年の特集「ジャーナリズムの地理学」をみてみよう。序論以外の6編全てがオンライン版を含めて基本的に新聞を扱っている。

6編中2編が新聞記事の定量的分析を行なっている。Howe（2009）は米国アリゾナ州フェニックスにおける主要日刊紙2紙を1999年から2007年まで調査した。フェニックス都市圏に関する記事から地名をカウントし、都市圏内の人口分布や1人当たり収入といった社会経済指標との関連性を13枚の地図で示すオーソドックスな地理学的研究である。

Buchanan（2009）はカナダの2紙について1894年から2005年までを調査した。抽出した7,129の記事をコード化し、世界、全国、州、地元の4つのスケールに分類し、3区分された時期の変化を考察している。地元の記事が減り、スケールの大きな記事が増えるという一般的な結果が示され、その傾向はトロントの新聞とオタワの新聞とでは多少異なっている。この論文では前半の研究レビューが充実しており、「読者は新聞の内容よりもそのデザイン

から場所のメッセージを受容する」と指摘し、『トロント・スター』1面の分析もしている。また、「新聞は1830年代のダブロイド紙初期の時代に当該都市への流入者を社会化する重要な役割を果たした」(Buchanan, 2009: 70)という記述は、「『石巻日日新聞』は地元を知り、生活するために必要な媒体だったのであり、同紙の部数増は転入者によって支えられていたのである」(山田, 1984: 224)という日本の状況と一致している。

Salovaara-Moring (2009) は英国の国際的金融紙『*The Financial Times*』におけるバルト三国の扱いを取り上げる。バルト三国がEUに加盟する前後2年間を含む2002年から2007年までのバルト三国に関する記事を定性的に分析した。11の記事を引用しながら、イデオロギー、経済、文化という3つのレベルに、時間性、空間性、主体性という3つの観点を交差させた枠組みで考察する。『*The Financial Times*』に代表される国際的ジャーナリズムは一望監視的なまなざしで、経済的および軍事的な観点から知識を集積して国家を観察する。その西洋的で支配的な物語は、バルト三国を一方で「ヨーロッパの良き生徒」と見做してその資本主義化を歓迎し、他方で東西の二分法のなかで極めて東に近い「境界地帯」であるバルト三国を複雑な局地的状況のなかで「代替的な資本主義」として位置づけ、共産主義への英雄的抵抗の主体と見做す。

Gabriele (2009) はジャーナリストによる地域調査の事例を取り上げる。19世紀に盛んであったスラム街への取材記事の歴史を辿り、その現代版として、2006年のカナダの英文紙に連載されたコラムを分析する。「1ヶ月のメイド」と題された連載記事はトロントの富裕地区で生活する中国系の女性が最低賃金の清掃業を体験するものである。カナダ生まれの貧困労働者である白人女性とともに働きながら、「汚れた秘密」を紙上で暴露していく⁶⁾。

その他、地理学内外で発表された研究をいくつか紹介したい。Hoare (1991) は企業の地理学とニュースの地理学を組み合わせる議論する。英国ヨークの地元企業ロントリー・マッキントッシュ社がスイスに本社を置くグローバル企業であるネスレ社に買収される際、英国議会の討論会で話題となった。この論文は英国4紙におけるこの討論会の報道を分析する。登壇者の政治的立場や代表する地域スケールを分析し、討論内容の地理的スケールについても分析している。この研究は、1つの新聞記事がその事象に関連する複雑な地理的スケール、記述主体としての新聞社と記者の立場、新聞ごとに異なる読者層、その読者の地域帰属アイデンティティなどの関係性を表象しているということを示している。

Mercer and Prisbrey (2004) の第一著者は地理学者である。環境リスク分野の雑誌に掲載されたこの論文は、米国ハンフォード核施設付近で起きた2000年の野火に関する新聞記事を調査した。ローカル、リージョナル、州、全国市場をそれぞれ有する6紙の記事を、野火発生からの時間経過とともに集計している。記事の内容を、単発的・主題的、論争的・非論争的などと分類する。最終的には、管理の強度の軸と確実性の軸により、記事内容を *dread*, *wary*, *confident*, *vigilant* の4象限に分類した。特に全国紙は *DOE* (米国エネルギー

表象を忘れない

省)からの情報提供に依存しているなど、政治的立場などの観点から各市場で差異が見出されるが、この論文ではそうした地理学的意義をさほど強調していない。

地理学以外の雑誌に掲載されたものとしては、Rantanen (2003)が地理学文献を参照しながら、場所感覚の概念を用いて19世紀におけるニュースの変容を論じている。電報の発明により、ロンドンやパリ、ウィーン、ベルリンが電子ニュースの新しい中心地になったという。電報は没場所性だけではなく、新しい場所感覚を生み出したという。遠隔地から届けられるニュースは地図上で同定できる認識を与えないものの、各地に住む読者に対して場所の名前を知らせる。「ニュースに登場する地名は公共の場所の名前である。それは読者に対して、どこかにある場所とここにいる読者との間の距離を撤廃する手段となる」(Rantanen, 2003: 447)。

Connell (2003)は两大戦間におけるスコットランドの新聞をナショナリズムの観点から調査した。英国連合の一王国としてのスコットランドの新聞を地方紙として位置づける。スコットランド西部の4紙と東部の2紙、そして全国紙2紙を比較し、「スコットランドの各新聞が、ブリテン島のあるいはスコットランドの現象として、いかに競合とナショナリズムの揺れ動く動態と歴史的に交渉してきたのかを理解しようとする」(Connell, 2003: 189)。例えば、ロンドンの『Daily Express』は1928年にスコットランド版を出し成功する。1932年には『Scottish Daily Express』に紙名を変更し、奥付欄に「Printed in Scotland」と記すなど、スコットランド性を強調するようになる。Connellは1920年から1936年の14年間を対象に各紙からサンプルを取り、各紙で共通する記事の割合を調査した。また、6紙の記事内容の変化についても調査し、ロンドン発行の新聞における記事対象がロンドンから英国全土へと移行していくのに対し、スコットランド各紙は地方色を強めるという。論文後半では1920年代のスコットランド独立運動に関する各紙の見出し記事を調査した。新聞社は政治運動に関する記事掲載だけでなく、講演や会合といった政治イベントの広告などでも関与する。こうした分析から、Connell (2003: 203)は「どんな新聞もその配布圏と報道の対象範囲とにおいて、真に国民的なものではありえない」と結論する。

Gison (2004)はシアトルにおける1990年代の都心再開発に関する研究の一部にメディア分析を含んでいる。パイン・ストリートの計画をめぐる論争を、交渉・最終提案・投票・結果と4つの時期に分け、シアトルの主要な地方紙2紙における記事を調査した。それらの情報発信源を主体属性によって、企業・公的機関・弁護士／非営利団体・市民／学者と分けて集計し、内容について現場・地方／都市圏・企業に分けて集計して考察した。報道の初期段階では新聞は開発側に立った報道をしており、異議申し立ての意見は含まれない。開発の取引が確定した2年後になってはじめて新聞は公的資金の過剰投入を報道するようになった。結論として、こうした批判的メディア研究は、地元のジャーナリズムが活力のある論争のための開かれた場として機能するために行われるべきだと主張する。

Branton and Dunaway (2009) は政治学の立場から、新聞報道における経済と地理の重要性を強調している。偏向報道は新聞の発行主体である組織の経営方針や、発行場所と報道対象地域との距離 (= 地理) によって説明できるという。米国カリフォルニア州で発行されている英文紙が取り上げられ、2004~2005 年にかけての米国—メキシコ間の移民に関する 1,227 の記事内容が評価された。記事を移民に対して肯定的か、否定的か、中立的かに分類し、その結果を新聞の発行場所と国境との距離、および発行主体を公共性の強い企業と私的所帯とに区分し、それらの関係を定量的に分析した。その結果、発行場所と国境からの距離に比例して否定的な記事の割合が増し、発行主体が公的な企業ほど否定的であることが示された。

3.4 表象論と新聞

このように、英語圏における新聞研究は、地理学が定量的分析へのこだわりをみせる一方で、メディア研究やコミュニケーション研究の分野でも地理学文献を引きつつ、新聞の地理的な側面を強調するものが散見されており、地理学的な新聞研究の手本となるだろう。それらでは、新聞が有するスケールが議論された。新聞社および記者という生産者は全国紙から地域紙、地方紙といったスケールを自らのアイデンティティとして保持する。新聞はスケールに応じた面的に広がる読者圏を有し、さまざまなスケールから収集される記事が掲載された物質としての新聞が解説される。記述される出来事は世界中に散らばっており、記者との関係において自己表象であったり他者表象であったりする。それは記者と読者が共有するナショナリズムの強化につながることもある。また、新聞が社会運動を記述して、支持したり批判したりして間接的に関与し、さらに新聞報道の批判的検討を通じて研究者も運動に加わることができるという社会実践への可能性も示されていた。

本稿では新聞に限定して検討したが、研究に新聞を用いる場合に、表象についての議論を知っているか否かで解釈は異なってくる。2 で議論した内容をここで単純化すべきではないが、2 と 3 の内容を関連付ける作業は必要であろう。まず、新聞における表象作用 (記事生産) を支えるジャーナリズムのイデオロギーについての理解が必要である。一般読者がジャーナリズムに要求する客観性や公平性、中立性などの理念の故に、ニュース報道は真偽という尺度で評価される。しかし、人文・社会科学においては新聞記事をこの基準で評価すべきではなく、表象の観点からは移り逝く生の現実を表象して物質的に固定化する報道が現実を構成するものと理解される。個々の新聞記事はオリジナルな表現ではなく、文体・比喩・修辭の (再) 利用・流用・盗用という間テクスト的産物である。

擬似イベントはないものの代用という意味での表象の本質であり、善悪の問題ではない。さまざまなスケールで起こる出来事を特定の地名と文法的に結びつける新聞記事における言語生産は、場所や地域といった地理的実体を想像・創造する。新聞が元々地理的な表象なの

表象を忘れない

ではなく、生産・消費される過程で地理的表象となる。記述対象としての出来事が特定の場所で起こる (take place) ことを重視し、それが誰 (作者) によって誰 (読者) に対して書かれるかを考える過程で、出来事や主体をさまざまなスケールの地理と結び付ける。

物質としての新聞が流通する過程は地理的に (地図上で) 辿ることができる。この特徴は、他のメディア・表現媒体では困難を強いられる民族誌的な調査を可能とする。

4 おわりに

本稿は、地理学における表象を再考することを目的とした。表象という語は日常的なものとしてではなく、学術用語として長い期間、多分野で用いられてきた。本稿では、地理学以外の表象論として、人類学の「表象の危機」、歴史学の「表象の限界」、社会学の「集合表象」、そして民族誌的な表象研究を志向するようになったカルチュラル・スタディーズについて概観した。これらは地理学全般に有用な議論に限定しているが、後半で検討した新聞研究にも関わるものである。

表象文化論の対象とされる作者による作品とは異なり、新聞は署名記事もあるがその多くが匿名性を特徴とする。文化的作品は作者の表現や思想が問題となるが、新聞報道は歴史学と同様に次々と過ぎ去っていく出来事を固定化し、時間の流れの節目でまとめられ、大衆的な歴史物語を形成する。その表象は前表象的な出来事との関連で捉えられる。

報道記者は人類学者さながら取材地へと赴き、観察・記録し、それを自国へ持ち帰る。生産から消費へといたる文化の回路は、新聞というメディアの場合はカルチュラル・スタディーズで要求されている民族誌的研究の可能性が開かれている。新聞社の経営や配布圏という物質的な側面についてはかつてから研究が進んでおり、また物質的な側面と記事内容に関する定量的・定性的分析という表象的な側面の関連性についてもすでに研究実績がある。それぞれの側面は地理的スケールとの関連で議論することも新聞研究の得意とするところである。

人類学と歴史学における表象論は、新聞の特徴に準えるだけでは意味がなく、その批判的意識を新聞にも向けなければならない。人類学が自己批判したのは、自国と他国という関係となりがちな自己と他者との関係であり、新聞の生産・消費が作り出すナショナルな集合表象について、批判的な新聞研究が必要とされる。歴史学的な批判としては、新聞のようなメディアが作り出す現実性が常に表象の限界を有していることを意識する必要がある。限界という表現には表象されない何か、カルチュラル・スタディーズに要求されている「生きられた文化」を想定し、そこにオーセンティックな価値を付与しがちだが、そこにも留保が必要である。表象概念が有する批判的意識を常に持ちつつ、多角的に現実を捉えていく目的において、新聞の研究利用が役立つであろう。

〔付記〕本稿は、2015年3月28日に日本大学で開催された日本地理学会春季学術大会で発表した。

注

- 1) カルチュラル・スタディーズの文脈では、森 (2005) が言及している Hall (1997) が包括的に表象概念を整理しており、参照されることが多い。
- 2) 『文化理論用語集』(ブルッカー, 2003) にも「表象／代表」の項目があり、同様の記述となっている。
- 3) J-STAGE は学術論文を PDF ファイルで公開しているウェブサイトであり、本文に用いられている語句の検索ができる。地理学では『地理学評論』や『人文地理』、『地学雑誌』、『季刊地理学』、『新地理』やいくつかの地方地理学会誌が公開されている。https://www.jstage.jst.go.jp/ (最終閲覧 2014 年 7 月 15 日)
- 4) 大城, 荒山, 中島が執筆している論集 (『郷土』研究会, 2003) の副題には表象が用いられている。
- 5) ラカプラはこの問題に引き続き取り組み、この時の報告タイトルと同名の著書を 1994 年に発表した。その一部は翻訳されている (ラカプラ, 1996)
- 6) 1900 年代の福岡県門司に関する新聞記事を調査した遠城 (1998) も参照のこと。

文 献

- 安達智史 (2007): 『社会分業論』再考——ナショナリズム論の視角から. 社会学年報 36 : 105-125.
- 阿部 潔・古川 彰 (2011): 社会表象研究の地平——「生きられた文化」への眼差し. 関西学院大学社会学部紀要 111 : 71-85.
- 荒山正彦 (1995): 文化のオーセンティシティと国立公園の成立——観光現象を対象とした人文地理学研究の課題. 地理学評論 68 : 792-810.
- 荒山正彦・大城直樹編 (1998): 『空間から場所へ——地理学的想像力の探求』古今書院.
- アンダーソン, P. 著, 小沢弘明訳 (1994): プロット化について——ふたつの崩壊. フリードランダー, S. 編, 上村忠男・小沢弘明・岩崎 稔訳『アウシュヴィッツと表象の限界』未来社, 119-137. Anderson, P. (1992): On emplotment: two kinds of ruin. Friedländer, S. ed. *Probing the limits of representation*. Harvard University Press, 54-65.
- アンドマール, S. ・ロヴェル, T. ・ウォルコウィッツ, C. 著, 奥田暁子監訳 (2000): 『現代フェミニズム思想辞典』明石書店. Lovell, T., Wolkowitz, C. and Andemahr, S. 1997. *A glossary of feminist theory*. Edward Arnold.
- 石川栄吉・梅棹忠夫・大村太良・蒲生正男・佐々木高明・祖父江孝男編 (1987): 『文化人類学事典』弘文堂.
- 磯江景孜 (1998): 表象. 廣松渉・子安宣邦・三島憲一・宮本久雄・佐々木力・野家啓一・末木文美士編『岩波 哲学・思想事典』岩波書店, 1339-1340.
- ウィリアムズ, R. 著, 岡崎康一訳 (1980): 『キーワード辞典』晶文社. Williams, R. (1976): *Keywords: a vocabulary of culture and society*. Fontana Press.

表象を忘れない

- 大石 裕・岩田 温・藤田真文 (2000)：地方紙のニュース制作過程——茨城新聞を事例として。慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要 50：65-86。
- 大城直樹・丹羽弘一・荒山正彦・長尾謙吉 (1993)：1980年代後半の人文地理学にみられるいくつかの傾向——イギリスの最近の教科書から。地理科学 48：91-103。
- 太田好信 (2009)：本章の概説。日本文化人類学会編『文化人類学事典』丸善, 218-219。
- 小川豊武 (2014)：戦後日本における「青年」「若者」カテゴリー化の実践——1950~60年代の新聞報道を事例として。マス・コミュニケーション研究 84：89-107。
- 遠城明雄 (1998)：近代的都市空間の形成と「社会的規律」——1890~1920年代の福岡県門司港を事例として。荒山正彦・大城直樹編『空間から場所へ』古今書院, 46-57。
- 狩野力八郎 (2002)：表象。小此木啓吾編『精神分析事典』岩崎学術出版社, 413-416。
- 神田孝治 (2001)：南紀白浜温泉の形成過程と他所イメージの関係性——近代期における観光空間の生産についての省察。人文地理 53：430-451。
- 川崎恵理子 (2013)：知識。藤永 保監修『最新心理学事典』平凡社, 515-516。
- 川原健太郎 (2009)：明治末期の地方新聞に関する一考察——「週刊多摩新聞」を中心に。早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊 16 (2)：37-47。
- 木田 元 (1993)：表象。森岡清美・塩原 勉・本間康平編『新社会学辞典』有斐閣, 1229。
- 木下直之・吉見俊哉編 (1999)：『ニュースの誕生——かわら版と新聞錦絵の情報世界』東京大学総合研究博物館。
- 「郷土」研究会編 (2003)：『郷土——表象と実践』嵯峨野書院。
- ギンズブルグ, C. 著, 藤田朋久訳 (1992)：表象 (ルプレザンタシオン) ——言葉・観念・事物。思想 819：62-84。Ginzburg, C. (1991): *Représentation: le mot, l'idée, la chose*. *Annales. Économies, Sociétés, Civilisations* 46: 1219-1234。
- ギンズブルグ, C. 著, 上村忠男訳 (1994)：ジャスト・ワン・ウィットネス。フリードランダー, S. 編, 上村忠男・小沢弘明・岩崎 稔訳『アウシュヴィッツと表象の限界』未來社, 90-118。Ginzburg, C. (1992): *Just one witness*. Friedländer, S. ed. *Probing the limits of representation*. Harvard University Press, 82-96。
- グリーンブラット, S. 著, 荒木正純訳 (1994)：『驚異と占有——新世界の驚き』みすず書房。Greenblatt, S. (1991): *Marvelous possessions: the wonder of the new world*. Oxford University Press。
- サイード, E. W. 著, 今沢紀子訳 (1986a)：『オリエンタリズム』平凡社。Said, E. W. (1978): *Orientalism*. Penguin Books。
- サイード, E. W. 著, 浅井信雄・佐藤成文訳 (1986b)：『イスラム報道——ニュースはいかにつくられるか』みすず書房。Said, E. W. (1981): *Covering Islam: how the media and the experts determine how we see the rest of the world*. Random House。
- サイード, E. W. 著, 大橋洋一訳 (1995)：『知識人とは何か』平凡社。Said, E. W. (1994): *Representations of the intellectual*. Vintage。
- 清水強志 (2008)：デュルケームの表象論。創価大学 Sociologica 13 (1, 2): 21-38。
- シャルチエ, R. 著, 二宮宏之訳 (1992)：表象としての世界。思想 812: 5-28。Chartier, R. (1989): *Le monde comme représentation*. *Annales. Économies, Sociétés, Civilisations* 44: 1505-1520。

- 人文地理学会編 (2013): 『人文地理学事典』 丸善出版。
- スピヴァク, G. C. 著, 上村忠男訳 (1998): サバルタンは語るができるか 上. みすず 445: 2-20. Spivak, G. C. (1988): Can the subaltern speak? Nelson, C. and Grossberg, L. (ed.): *Marxism and the interpretation of culture*. University of Illinois Press, 271-313.
- スミス, S. J. 著, 廣松 悟訳 (1992): ニュースと恐怖の伝播. バージェス, J. ・ゴールド, J. R. 編著, 竹内啓一監訳『メディア空間文化論』古今書院, 277-302. Smith, S. J. (1985): News and the dissemination of fear. Burgess, J. and Gold, J. R. eds. *Geography, the media and popular culture*. Croom Helm, 229-253.
- 瀬川真平 (2013): 博物館. 人文地理学会編『人文地理学事典』丸善出版, 310-311.
- 谷川 渥 (2000): 表象. 猪口孝・大澤真幸・岡沢憲美・山本吉宣・リード, S. R. 編『政治学事典』弘文堂, 916.
- デリダ, J. 著, 高橋允昭訳 (1970): 『声と現象——フッサール現象学における記号の問題への序論』理想社. Derrida, J. (1967): *La voix et le phénomène*. Universitaires de France.
- 中島弘二 (1998): 林野における近代空間の生産——入会林野の政治経済学. 荒山正彦・大城直樹 編『空間から場所へ』古今書院, 30-45.
- 永淵康之 (2004): マーカス・フィッシャー『分化批判としての人類学』. 小松和彦・田中雅一・谷泰・原 毅彦・渡辺公三編: 『文化人類学文献事典』弘文堂, 214-215.
- 成瀬 厚・杉山和明・香川雄一 (2007): 日本の地理学における言語資料分析の現状と課題——地理空間における言葉の発散と収束. 地理学評論 80: 567-590.
- 西部 均 (2013): 都市史研究と地理学. 人文地理学会編『人文地理学事典』丸善出版, 448-449.
- バージェス, J. A. 著, 山田晴通訳 (1992): ユートピアだより: マスコミ, 暴動, インナー・シティの神話. バージェス, J. ・ゴールド, J. R. 編著, 竹内啓一監訳『メディア空間文化論』古今書院, 233-275. Burgess, J. (1985): News from nowhere: the press, the riots and myth of the inner city. Burgess, J. and Gold, J. R. ed. *Geography, the media and popular culture*. Croom Helm, 192-228.
- バージェス, J. ・ゴールド, J. R. 編著, 竹内啓一監訳 (1992): 『メディア空間文化論——メディアと大衆文化の地理学』古今書院. Burgess, J. and Gold, J. R. eds. (1985): *Geography, the media and popular culture*. Croom Helm.
- 樋口摩彌 (2014): 明治初年における「新聞」受容の風景——『京都府布令書』を手がかりに. メディア史研究 36: 103-124.
- ブーアスティン, D. 著, 後藤和彦・星野郁美訳 (1964): 『幻影の時代——マスコミが製造する事実』東京創元社. Boorstin, D. (1962): *The image; or what happened to the American dream*. Atheneum.
- フーコー, M. 著, 渡辺一民・佐々木 明訳 (1974): 『言葉と物——人文科学の考古学』新潮社. Foucault, M. (1966): *Les mots et les choses*.
- 福井一喜 (2013): 広告媒体としてのローカル新聞の存立形態——長野県飯田市の事例から. 地域研究年報 35: 79-90.
- フリードランダー, S. 編, 上村忠男・小沢弘明・岩崎 稔訳 (1994): 『アウシュヴィッツと表象の限界』未来社. Friedländer, S. ed. (1992): *Probing the limits of representation: Nazism and the "Final Solution"*. Harvard University Press.

表象を忘れない

- フリーマン, D. 著, 木村洋二訳 (1995): 『マーガレット・ミードとサモア』 みすず書房. Freeman, D. (1983): *Margaret Mead and Samoa: the making and unmaking of an anthropological work*. Cambridge: Harvard University Press.
- ブルッカー, P. 著, 有元 健・本橋哲也訳 (2003): 『文化理論用語集——カルチュラル・スタディーズ+』 新曜社. Brooker, P. (1998): *Cultural theory: a glossary*. Hodder Education Publishers.
- ブルッカー=グロス, S. R. 著, 原田ひとみ訳 (1992): ニュースにおける場所概念の変遷. バージェス, J. ・ゴールド, J. R. 編著, 竹内啓一監訳『メディア空間文化論——メディアと大衆文化の地理学』 古今書院, 69-94. Brooker-Gross, S. R. (1985): The changing concept of place in the news. Burgess, J. and Gold, J. R. eds. *Geography, the media and popular culture*. Croom Helm, 63-85.
- ホホワイト, H. 著, 上村忠男訳 (1994): 歴史のプロット化と真実の問題. フリードランダー, S. 編, 上村忠男・小沢弘明・岩崎 稔訳『アウシュヴィッツと表象の限界』 未来社, 57-89. White, H. (1992): Historical emplotment and the problem of truth. Friedländer, S. ed. *Probing the limits of representation*. Harvard University Press, 37-53.
- マーカス, G. E. ・フィッシャー, M. M. 著, 永淵康之訳 (1989): 『文化批判としての人類学』 紀伊國屋書店. Marcus, G. E. and Fischer, M. M. (1986): *Anthropology as cultural critique: an experimental moment in the human sciences*. University of Chicago Press.
- マクルーハン, M. 著, 後藤和彦・高儀 進訳 (1967): 『人間拡張の原理』 竹内書店. McLuhan, M. (1964): *Understanding media: the extension of Man*. McGraw-Hill.
- マッシー, D. 著, 森 正人・伊澤高志訳 (2014): 『空間のために』 月曜社. Massey, D. (2005): *For space*. Sage.
- 水岡不二雄 (2013): 空間. 人文地理学会編『人文地理学事典』 丸善出版, 90-91.
- 宮島 喬 (1988): 集合表象. 見田宗介・栗原 彬・田中義久編『社会学事典』 弘文堂, 435-436.
- 毛利嘉孝 (2012): 表象. 大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』 弘文堂, 1072-1073.
- 森 正人 (2005): 節合される日本文化と弘法大師——1934年の「弘法大師文化展覧会」を中心に. 地理学評論 78: 1-27.
- 森 正人 (2009): 言葉と物: 英語圏人文地理学における文化論的転回以後の展開. 人文地理 61: 1-22.
- 森 正人 (2013): ツーリズム空間の形成. 人文地理学会編『人文地理学事典』 丸善出版, 536-537.
- 山崎庸佑 (1994): 表象. 木田元・野家啓一・村田純一・鷺田清一編『現象学事典』 弘文堂, 399-400.
- 山田泰完 (2014): 表象の記号. 人文社会科学研究 54: 1-14.
- 山田晴通 (1984): 宮城県石巻市における地域紙興亡略史——地域紙の役割変化を中心に. 新聞学評論 33: 215-229.
- 山田晴通 (1985a): 東北地方における日刊地域紙の立地. 東北地理 37: 95-111.
- 山田晴通 (1985b): 日刊地域紙の系列展開——東北地方における二つの事例. 新地理 33: 30-41.
- 山田晴通 (1986): 地理学におけるメディア研究の現段階——「情報の地理学」構築のために. 地理学評論 59: 67-84.
- 山田晴通 (1999): 昭和初期の長野県松本市における小規模日刊紙——紙面からみた「朦朧新聞」

- の実態. 東京経済大学人文自然科学論集 107 : 13-36.
- 山田晴通 (2009) : 佐賀県唐津市における地域史興亡略史——明治後期 (1890 年代) から『唐津新聞』廃刊 (2008 年) まで. コミュニケーション科学 29 : 143-169.
- 山本正三・奥野隆史・石井英也・手塚 章編 (1997) : 『人文地理学事典』朝倉書店.
- ラカブラ, D. 著, 小沢弘明訳 (1994) : ホロコーストを表象する——歴史家論争の省察. フリードランダー, S. 編, 上村忠男・小沢弘明・岩崎 稔訳『アウシュヴィッツと表象の限界』未來社, 138-171. Lacapra, D. (1992): Representing the Holocaust: reflections on the historians' debate. Friedländer, S. ed. *Probing the limits of representation*. Harvard University Press, 108-127.
- ラカブラ, D. 著, 小沢弘明訳 (1996) : 歴史・理論・トラウマ——行動化と徹底操作. 現代思想 24 (12): 86-101. Lacapra, D. (1994): *Representing the Holocaust: history, theory, trauma*. Cornell University Press.
- ルフェーヴル, H. 著, 斎藤日出治訳 (2000) : 『空間の生産』青木書店. Lefebvre, H. (1974): *La production de l'espace*. Anthropos.
- Branton, R. P. and Dunaway, J. (2009): Slanted newspaper coverage of immigration: the importance of economics and geography. *The Policy Studies Journal* 37: 257-273.
- Buchanan, C. (2009): Sense of place in the daily newspaper. *Aether* 4: 62-84.
- Connell, L. (2003): The Scottishness of the Scottish press: 1918-39. *Media, Culture & Society* 25: 187-207.
- Dubow, J. (2009): Representation. Gregory, D., Johnston, R., Pratt, G., Watts, M. and Whatmore, S. eds. *The dictionary of human geography 5th ed.* Wiley-Blackwell, 645-646.
- Duncan, J. (2000): Representation. Johnston, R., Gregory, D., Pratt, G., Watts, M. and Whatmore, S. eds. *The dictionary of human geography 4th ed.* Wiley-Blackwell, 703-704.
- Duncan, J. and Ley, D. (1993): Introduction: representing the place of culture. Duncan, J. and Ley, D. eds. *Place/culture/representation*. Routledge, 1-21.
- Gabriele, S. (2009): "Dirty secrets": slumming and the geography of journalism. *Aether* 4: 1-21.
- Gibson, T. A. (2004): Covering the world-class downtown: Seattle's local media and the politics of urban redevelopment. *Critical Studies in Media Communication* 21: 283-304.
- Hall, S. 1997. The work of representation. Hall, S. ed. *Representation: Cultural representations and practices*. Sage, 13-74.
- Hoare, A. G. (1991): Making the news: spatial and non-spatial biases in British parliamentary reports of the Rowntree-Mackintosh takeover. *Geografiska Annaler* 73B: 95-109.
- Howe, P. D. (2009): Newsworthy spaces: the semantic geographies of local news. *Aether*, 4, 43-61.
- Johnston, R. J. (1994): Representation. Johnston, R. J., Gregory, D. and Smith, D. M. eds. *The dictionary of human geography 3rd ed.* Blackwell, 527.
- Mercer, D. and Prisbrey, D. (2004): Vigilant geography: newspaper coverage of a wildfire at the Hanford nuclear site. *Environmental Practice* 6: 247-256.
- Rantanen, T. (2003): The new sense of place in 19th-century news. *Media, Culture & Society* 25: 435-449.

表象を忘れない

Salovaara-Moring, I. (2009): The East as an object of governance: journalism and spaces of power. *Aether* 4: 85-101.